

居場所感の背景要因の検討

— 集団適応に関連する欲求及び行動に注目して —

岡本 咲来・古川 善也・増田 成美・上手 由香

Factors Behind the Ibasho: Focusing on the needs and behaviors related to group adaptation

Saki Okamoto, Yoshiya Furukawa, Narumi Masuda and Yuka Kamite

In this study, we hypothesized that the psychological Ibasho, which arises in relationships with others, is a sense of unconditional affirmation of one's true self and an adaptive sense of being needed by others. The purpose of this study was to examine the effects of individual desires and behaviors on Ibasho in order to obtain an understanding of how they functioned. We measured Ibasho, over-adaptation, rejection-avoidance need (desire not to be rejected by others), and interpersonal dependency in 146 university students. We then examined the validity of the model using covariance structure analysis. The results showed that affectional dependency and sense of self-inadequacy predicted the sense of role through an orientation to others. In addition, instrumental dependency predicted role sense through an orientation to others. On the other hand, comfort was not significantly related to excessive external adaptation and rejection-avoidance need. These results suggest a difference in the nature of two aspects of Ibasho: role sense and comfort. The sense of role was a concept that depended on external criteria and was predicted by orientation to others, which is excessive external adaptation. Based on these results, we recommend adaptive Ibasho.

キーワード : Ibasho, over-adaptation, rejection-avoidance need, interpersonal dependency

問題

1. 居場所感について

近年、「心の居場所」というように、「居場所」という言葉は、物理的空間だけでなく心理的な空間についても使用されている(石本, 2009)。原田・滝脇(2014)は先行研究の居場所感尺度を概観して、居場所感を構成する概念として「自己有用感」、「役割感」、「本来感」、「被受容感」、「帰属意識」、「安心感」、「自己肯定感」などを見出している。また、石本(2010a)は、他者との関係の中でありのままの個人が認められることと、役に立っていると思えることが居場所の心理的条件であると述べている。中藤(2012)は個人が居場所のなさや居心地の悪さを感じる時、“その空間に身体

はあるが、その場に<私>は居られない”という状況であり、交換不可能で個別な<私>として存在することが難しいという個人の実存にとって危機的な状況であると述べている。そして、小沢(2002)は、そのような居場所の感覚が問題になるということ自体が、多くの人が他者との関係の中での温かい交流を大切に思い、そのような人間関係をその居場所ではほしい、得たいと感じているということを示していると述べている。

これらのことから、居場所は自己を必要としてくれたり認めてくれたりする他者の存在によって生じる場であると考えられる。居場所研究の中には「自分ひとりの場所」を指す“個人的居場所”に関する研究も存在するが(杉本・庄司, 2006; 植野, 2017; 佐藤・大津・佐野, 2013 など), 本研究で扱う「居場所」及び「居場所感」は、他者との関係性の中に成り立つものとして捉える。そして、「居場所感」とは、他者との関係性を前提として個人が周囲に働きかけた結果として得られる概念であり、「居場所感」を感じている状態は、他者から自己が受容されている状態という点で、社会的に適応した状態であると考えられる。“社会への適応”と他者への注意や関心は不可分な概念であると考えられるため、自分の居場所になりうる社会集団に対して、適応しようとする行動ないし適応したいという欲求は居場所感の形成に関連すると考えられる。

また、原田・滝脇(2014)は、「居場所がある状態」を周囲との関係性によって自己の存在を確認・実感し、自分らしさを喚起・維持できている状態ととらえ、「居場所」を自己支持的な自己像や自己概念を形成する場、すなわち「自己にまとまりを与えるもの」と述べている。今枝(2017)は、人は青年期から成人期にかけて、自分とは何者か、何者になるのかといった課題を、友人関係や集団生活の中でさまざまな葛藤や経験をしながら模索し、自分らしさを獲得していくという。居場所が自分らしさをかたちづくる場であると捉えると、「居場所」は青年期における自己形成の場として重要になると考えられる。

青年期の居場所感について検討した研究には、家族関係や友人関係などを対象に調査を行ったものがあるが(佐藤ら, 2013; 渡邊・岩瀧・山崎, 2018), 大学生の「自分の居場所を構成する人」を調査した植野(2017)は、調査対象者の約半数が、学校での授業で関わる友人、部活動やサークルなど趣味活動で関わる友人、アルバイト仲間など、“友人”や“仲間”である人々を挙げていたと述べている。これは家族や恋人関係を挙げた人よりも多い結果となり、大学生は自分の「居場所」を考える時に、周囲の友人関係について考える人が多いことが示唆されている。中学生と大学生の居場所感について検討した石本(2010a)は、居場所感覚の構成概念である本来感や自己有用感が、大学生の家庭における自己受容や充実感といった心理的適応に影響を及ぼさなかったことを報告している。このことから、本研究では、部活動やサークル集団、研究室やアルバイトなど、青年期から成人期にあたる大学生・院生にとって特に他者との関係性を形成・維持したいという感情をもつと考えられる集団での居場所感に対して、個人の欲求や社会適応に対する態度、行動がどのような影響を与えるのかについて検討する。

2. 居場所感に影響を与えられられる要因

過剰適応は、個人が集団に適応しようとする際に起きる問題であると考えられる。益子(2013)は、

過剰適応を「外的適応が強く、内的適応が損なわれた状態」であると述べている。内的適応は幸福感や満足感を経験して心的状態が安定した過程にある場合のことをさし、外的適応は個人が所属する文化や社会的環境に対する適応のことをさす(北村, 1965)。

過剰適応概念の階層性について検討した石津・安保(2009)は、養育態度や幼少期の気質などの影響を受けた個人の性格特徴が過剰な外的適応行動を予測すると主張している。また、益子(2008)によると、過剰適応傾向にある者は、低い心理的適応感を補償するために、他者の承認を得ようとする可能性があると述べている。さらに、Hermann, Leonardelli, & Arkin(2002)は、自己不信(self-doubt)が高い者は、自尊感情の維持に対して過敏であるために様々な自尊感情維持方略を取ると主張している。したがって、自己不全感が高い場合、その内的な不全感を解消しようとして過剰な外的適応が生じると考えられる。本研究では過剰適応概念を、自分を犠牲にしても他者の期待に応えようとする態度や、他者から認められたい、気に入られたい、嫌われたくないという欲求またはそれに伴う行動(自己抑制的行動も含む)などの過剰な外的適応と、自分への自信のなさや自己評価の低さなどの内的な不全を示す概念である自己不全感の2つの構造からなると考え、自己不全感が過剰な外的適応を予測すると仮定する。

過剰適応傾向にある者は他者から見捨てられる不安を感じていることが示唆されており(益子, 2008; 山田, 2010)、他者からの否定的評価や拒絶を回避する傾向にあると考えられる。一方で、外的な期待や要求に応える態度は、社会適応にはある程度必要不可欠である。尾関(2011)は、外的適応行動は所属集団の他成員からの肯定的評価や受容につながり、集団の中での他成員との良好な関係の構築や集団アイデンティティを獲得することにつながる可能性を示唆している。中学生を対象として過剰適応と学校適応の関連を検討した石津・安保(2008)は、過剰適応の外的側面は学校適応と正の関連をもつことを明らかにしている。

また、過剰適応に類似した概念として、拒否回避欲求が挙げられる。拒否回避欲求とは、他者から拒否されたくないという欲求のことを指す(菅原, 1986)。拒否回避欲求が高い人は、愛想がよく周囲に同調する傾向があり(小島・太田・菅原, 2003)、川崎・伊藤・小玉(2006)は、拒否回避欲求が高い人は社会的評価や他者からの受容によって自尊心を維持していることを指摘した。援助要請行動の抑制要因を検討した原田・出雲(2008)は、拒否回避欲求の高さが、援助を要請することに対する負担懸念を予測すると述べている。また、菅原(1986)は、拒否回避欲求の強い人は、周囲との軌轢を最小限にすることで集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとする、集団への帰属感を希求する者である可能性が高いと述べている。これらのことから、拒否回避欲求が高い人にみられる傾向は、過剰適応傾向を示す人の特徴に類似していると考えられ、それらの傾向の有意な関連を示した先行研究もみられる(大西・岡村, 2012; 石井・荻田・善明, 2017)。そのため、他者との関係性の構築や維持に関連する過剰適応及び拒否回避欲求は、居場所感に関連すると考えられる。

過剰な外的適応や拒否回避欲求は他者との関係維持方略であると考えられるため、前述した尾関(2011)の研究が示唆しているように、必ずしも自己不全感が高いために起こる行動や欲求ではないと考えられる。例えば、「他者から支えられたい」という欲求によって他者との関係維持方略がとられる可能性もある。この欲求には、他者に対する依存が関連していると考えられる。APA 心理学大

辞典 (2013) では、依存は「他者からの援助を直感的に期待したり、情緒的、金銭的支援や保護、安全、日常の世話を他者に積極的に求めている状態」と説明されている。この依存を求める感情は、先行研究において“依存要求”や“依存欲求”と呼ばれている。

高橋 (1968) は、依存要求を、他者からの助力や承認を求めるものであると述べている。また、依存欲求の高い人は、意識的・非意識的に他者に対して過度に承認や支持を求める態度をとる (Bandura & Walters, 1963)。さらに、依存的な人は他者の要求や期待に対してできる限り応えようとする傾向があり (Bornstein, 1992)、他者の態度や行動に対して敏感であることが示されている (石川・山口・澤・高田・大久保, 2014)。これらの特徴は、過剰な外的適応や拒否回避欲求の尺度が測定する傾向と類似していると考えられる。したがって、対人的な依存欲求が高い人は、他者からの評価や承認を求める傾向にあると考えられ、また、他者から拒絶されることで欲求を満たすことができなくなると考えられることから、対人的な依存欲求が高い場合に、過剰な外的適応や、拒否回避欲求が生じる可能性がある。

幼年期を脱してもなお依存的であることは問題視されてきた (江口, 1966)。しかし、依存性が問題になるのはそれが過度であったり病的な場合である。高橋 (1968) は、依存は発達とともに変容しながらも存在し続けるものであり、自立の獲得・増大に必要なものであるとしている。また、肯定的な依存性の在り方について検討した関 (1980) は、成熟し適応的な人間とは、他者と相互依存的な関係をもつことができ、そこから得た安定感をもとに自立的な行動をとれる人間であると述べている。したがって、対人依存欲求が高い場合には過剰な外的適応や拒否回避欲求も高まると考えられるが、その適応的な側面に焦点を当てると、対人依存欲求は居場所感を得るために効果的にはたらくと考えられる。

しかし精神医学分野における「依存」は、主体が他者に左右され他者の行動なしではその個体が生きていけないような状態、他者の行動によってその個体の行動が決定する状態と説明されており (加藤他, 2011)、竹澤・小玉 (2004) は、対人依存欲求の高い人は意思決定に関する自己評価が低いことを示唆している。自己不全感は自分に対する全般的な自信のなさを示した概念である。したがって対人依存欲求と自己不全感は「自分への自信のなさ」の概念を含み、正の関連があると考えられる。過剰適応と居場所感の関連について検討した後藤・伊田 (2013) は、自己不全感と居場所感には負の関連があることを明らかにしている。そのため、自己不全感は直接的に居場所感を低減する要因になると考えられる。以上のことから、本研究では自己不全感や対人依存欲求が、過剰な外的適応及び拒否回避欲求を介した場合に居場所感に与える影響について検討することを目的とする。また、自己不全感や対人依存欲求が直接的に居場所感に与える影響についても併せて検討する。居場所感が心理的適応と関連があることは先行研究 (石本, 2010b ; 石本・倉澤, 2009) において示されているが、石本 (2010a) によると、居場所感を高める要因や阻害する要因については未だ明らかにされていない部分が多い。居場所感の背景にある要因を検討することで、「居場所感」概念に対する新たな知見を得ることができると考える。本研究における仮説モデルを Figure 1 に示す。

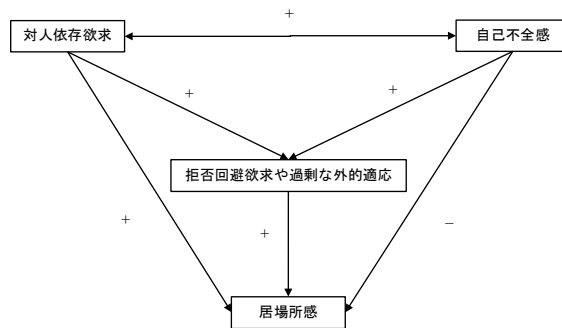


Figure 1. 本研究における仮説モデル。

方法

調査時期 2020年10月～11月に実施した。

調査協力者 質問紙に回答をした参加者は、大学生146名（男性40名、女性103名、未記入3名）、平均年齢21.1歳（ $SD = 1.48$ ）であった。

調査内容 本研究では調査協力者に対して居場所感、過剰適応、拒否回避欲求、対人依存欲求を測定する尺度に回答するよう求めた。

(a) **居場所感** 則定 (2007) の青年版心理的居場所感尺度を用いた。青年版心理的居場所感尺度は、「〇〇と一緒にいると、ありのままの自分でいいのだと感じる」などの「本来感」因子4項目、「〇〇の役に立っている」などの「役割感」因子6項目、「〇〇に受け入れられている」などの「被受容感」因子6項目、「〇〇と一緒にいると、安心する」などの「安心感」因子4項目の計4因子20項目で構成されている。想起対象を教示する「〇〇」の部分には、「その人たち」という言葉を入れ、具体的に学生生活において自分と関わりのあるコミュニティ（学部、研究室、アルバイト先、部活動、サークルなど）を想起させた上で回答を求めた。それぞれの項目に対する回答は5件法で求めた。

(b) **過剰適応** 石津 (2006) の青年期前期用過剰適応尺度を用いた。青年期前期用過剰適応尺度は、「考えていることをすぐには言わない」などの「自己抑制」因子7項目、「自分をよく見せたい」などの「人からよく思われたい欲求」因子5項目、「自分が少し困っても、相手のために何かしてあげることが多い」などの「他者配慮」因子8項目、「期待にはこたえなくてはいけないと思う」などの「期待に沿う努力」因子7項目、「自分には自信がない」などの「自己不全感」因子6項目の計5因子33項目で構成されている。それぞれの項目に対する回答は5件法で求めた。

(c) **拒否回避欲求** 小島・太田・菅原 (2003) の拒否回避欲求尺度を用いた。拒否回避欲求尺度は、「意見を言う時、みんなに反対されないと気になる」などの1因子9項目で構成されている。それぞれの項目に対する回答は5件法で求めた。

(d) **対人依存欲求** 竹澤・小玉 (2004) の対人依存欲求尺度を用いた。対人依存欲求尺度は、「困

っているときや悲しいときには、誰かに気持ちをわかってもらいたい」などの「情緒的依存欲求」因子 10 項目と「自分一人で決断しかねるときには、誰かの意見に頼りたい」などの「道具的依存欲求」因子 10 項目の計 20 項目で構成されている。それぞれの項目に対する回答は 6 件法で求めた。

手続き オンラインでの授業終了後、授業を受講している学生に対して依頼を行い、各自の自宅でオンライン上での回答を求めた。また、SNS を介して研究内容を説明し、オンライン上での回答を求めた。回答はすべて無記名で行われた。

結果

尺度の検討

心理的居場所感 則定 (2007) を踏まえ、因子数を 4 に設定して最尤法・プロマックス回転による確認的因子分析を行った。しかし、則定 (2007) における「本来感」因子と「被受容感」因子、「本来感」因子と「安心感」因子、「被受容感」因子と「安心感」因子の因子間相関がいずれも .800 以上を示したため、スクリープロット基準により因子数を 2 に変更して、再度、探索的因子分析を行った。その結果、抽出された 2 因子について項目内容を確認し因子名を決定した。第 1 因子は安心感や被受容感、本来感を測定する項目が含まれていたため「居心地のよさ」、第 2 因子は役割を通じた自己の存在意義を測定する項目が含まれていたため「役割感」と名付けた。項目と因子負荷量を Table 1 に示す。下位尺度ごとの α 係数は $\alpha = .964$, $\alpha = .915$ であった。

Table 1
居場所感尺度の因子分析 (最尤法・プロマックス回転)

項目	Factor1	Factor2	共通性
第1因子：居心地のよさ			
⑩その人たちと一緒にいると、くつろげる。	.936	-.053	.812
⑨その人たちと一緒にいると、安心する。	.932	-.016	.849
④その人たちと一緒にいると、ホッとする。	.890	.009	.803
①その人たちと一緒にいると、ありのままの自分を表現できる。	.889	-.128	.654
⑭その人たちと一緒にいると、居心地がいい。	.888	-.035	.747
⑬その人たちは、いつでも私を受け入れてくれる。	.838	-.080	.618
⑩その人たちと一緒にいると、自分らしくいられる。	.827	.025	.713
⑤その人たちと一緒にいると、ありのままの自分でのど感じる。	.793	.083	.725
⑧その人たちに無条件に受け入れられている。	.769	-.062	.530
⑫その人たちと一緒にいると、ここにいるのど感じる。	.711	.180	.712
⑦その人たちは、私を大切にしてくれる。	.700	.000	.490
⑮その人たちと一緒にいると、心から泣いたり笑ったりできる。	.693	.192	.697
③その人たちに無条件に愛されている。	.527	.267	.539
第2因子：役割感			
⑥その人たちの支えになっている。	-.206	1.033	.823
②その人たちの役に立っている。	-.234	.922	.613
⑬その人たちに必要とされている。	.093	.800	.749
⑪その人たちから頼りにされている。	-.031	.784	.583
⑫その人たちに対して、自分にしかできない役割がある。	-.076	.748	.488
⑯その人たちのためにできることがある。	.121	.660	.558
⑰その人たちと一緒にいると、自分のことを、かけがえのない人間なのど感じる。	.343	.536	.653
α 係数			
	.964	.915	
因子間相関			
	Factor1	.675	
	Factor2	.675	1.000

過剰適応 石津 (2006) を踏まえ、因子数を 5 に設定して最尤法・プロマックス回転による確認的因子分析を行った。分析の結果、石津 (2006) における「他者配慮」因子と「期待に沿う努力」因子の間に .837 と高い因子間相関がみられたため、因子数を 4 に変更し探索的因子分析を行った。因子負荷量が .40 未満の項目、共通性が .30 未満であった 3 項目を除外し、残りの 30 項目に対して再度、因子分析を行った。抽出された 4 因子について項目内容を確認し因子名を決定した。第 1 因子は、石津 (2006) における「他者配慮」と「期待に沿う努力」の項目から構成されており、因子負荷の高い項目の内容から、自己犠牲的な要素を多分に含む因子であると考えられたため、「他者志向性」と名付けた。第 2 因子は「期待に沿う努力」因子に含まれていた 1 項目以外は石津 (2006) における「自己不全感」因子から構成される因子であったため、「自己不全感」と名付けた。第 3 因子は元の尺度の項目と同じ項目を含む因子であったため、石津 (2006) と同様に「自己抑制」とした。また、第 4 因子は石津 (2006) における「人からよく思われたい欲求」の因子に含まれていた項目の因子負荷量が大きく、また、石津 (2006) において「期待に沿う努力」に含まれていた項目もまた、人からよく思われたいという欲求を表す内容であると解釈できたため、「人からよく思われたい欲求」と名付けた。項目と因子負荷量を Table 2 に示す。下位尺度ごとの α 係数は、 $\alpha = .860$, $\alpha = .883$, $\alpha = .877$, $\alpha = .830$ であった。

Table 2
過剰適応尺度の因子分析 (最尤法・プロマックス回転)

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
第1因子: 他者志向性					
②自分が少し困っても、相手のために何かしてあげることが多い。	.879	-.286	-.064	-.174	.527
⑥やりたくないことでも無理をしてやることが多い。	.776	.024	-.015	-.062	.562
⑨つらいことがあっても我慢する。	.638	-.020	.144	.028	.492
⑯人からの要求に敏感なほうである。	.613	-.018	-.005	-.069	.325
⑩「自分さえ我慢すればいい」と思うことが多い。	.612	.133	.171	-.209	.456
⑮自分の価値がなくなってしまうのではないかと心配になりがむしやらにがんばる。	.475	.242	.011	-.002	.382
⑬期待にこたえるために、成績をあげるように努力する。	.469	-.052	-.139	.429	.564
⑰期待にはこたえなくてはいけないと思う。	.467	.068	-.027	.333	.525
⑭とにかく人の役に立ちたいと思う。	.461	-.148	-.107	.256	.348
⑪他者からの期待を敏感に感じている。	.429	.125	-.075	.198	.354
第2因子: 自己不全感					
③自分には自信がない。	.028	.940	-.114	-.060	.794
④自分には、あまりよいところがない気がする。	.093	.893	-.103	-.098	.759
⑧自分の評価はあまりよくないと思う。	-.124	.866	.019	-.112	.687
⑥自分のあまりよくないところばかり気になる。	.000	.818	-.124	.086	.612
②自分はひとりぼっちと感じることがある。	.027	.538	.153	.001	.409
③自分らしさが無いと思う。	.054	.515	.088	.038	.357
④期待にこたえないと、しかられそうで心配になる。	.024	.473	.079	.162	.340
第3因子: 自己抑制					
⑥考えていることをすぐには言わない。	-.135	-.153	.812	.056	.537
⑦自分自身か思っていることは、外に出さない。	.039	-.166	.792	-.052	.529
⑬心に思っていることを人に伝えない。	-.164	-.151	.738	-.048	.607
⑥思っていることを口に出不ない。	.024	.196	.734	-.034	.724
⑬自分の意見を通そうとしない。	-.112	-.095	.610	.076	.398
⑨相手と違うことを思っているでも、それを相手に伝えない。	-.063	.164	.605	.131	.507
⑥自分の気持ちをおさえてしまうほうだ。	.381	.066	.562	-.124	.589
第4因子: 人からよく思われたい欲求					
⑯人から認めてもらいたいと思う。	-.034	.046	-.093	.808	.619
⑮自分をよく見せたいと思う。	-.216	-.050	.175	.792	.533
⑬人から気に入られたいと思う。	-.114	-.034	-.049	.773	.504
⑥相手にさらわれないように行動する。	.003	.205	.086	.638	.542
⑯人からほめてもらえることを考えて行動する。	.143	.067	-.064	.557	.424
③人から「能力が低い」と思われないようにがんばる。	.075	-.118	.120	.547	.362
α 係数	.860	.883	.877	.830	
因子間相関					
Factor1	1.000	.401	.303	.542	
Factor2	.401	1.000	.494	.177	
Factor3	.303	.494	1.000	.174	
Factor4	.542	.177	.174	1.000	

対人依存欲求 竹澤・小玉 (2004) を踏まえ、2 因子解を採用し、最尤法による確認的因子分析を実施した。因子負荷量が .400 未満の項目があったためその項目を除外し、再度分析を行った。その結果、2 因子解で一定の適合度が得られた (適合度指標の値 CFI など)。竹澤・小玉 (2004) を踏まえて、第 1 因子は情緒的依存欲求、第 2 因子を道具的依存欲求とした。下位尺度ごとの α 係数は、 $\alpha = .896$, $\alpha = .858$ であった。

各変数間の相関

拒否回避欲求 ($\alpha = .836$)、および対人依存欲求、過剰適応、居場所感の下位尺度ごとの項目の平均値から尺度得点を算出した。次に、各尺度間の関係について確認するために相関分析を行った (Table 3)。まず対人依存欲求の下位尺度について、情緒的依存欲求は他者志向性、人からよく思われたい欲求、拒否回避欲求、居場所感の 2 つの下位尺度との間に有意な正の相関が認められた ($ps < .05$)。道具的依存欲求は、拒否回避欲求や居場所感の 2 つの下位尺度との間に有意な正の相関を示したが ($ps < .05$)、他者志向性、人からよく思われたい欲求、自己抑制との間に有意な関連性は示されなかった。また、情緒的依存欲求と道具的依存欲求のどちらも自己不全感との間に有意な関連性は認められなかった。自己不全感は他者志向性、人からよく思われたい欲求、自己抑制、拒否回避欲求との間に有意な正の相関、居場所感の 2 つの下位尺度との間に有意な負の相関が認められた ($ps < .05$)。自己抑制は、居場所感の 2 つの下位尺度との間に有意な負の相関が認められた ($ps < .05$)。拒否回避欲求と役割感の間には有意な負の相関がみられた。

Table 3
各変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 情緒的依存欲求	1.000								
2 道具的依存欲求	.438 **	1.000							
3 自己不全感	.097	-.016	1.000						
4 他者志向性	.305 **	-.140 +	.427 **	1.000					
5 人からよく思われたい欲求	.421 **	.061	.211 *	.575 **	1.000				
6 自己抑制	-.008	-.148 +	.534 **	.305 **	.171 *	1.000			
7 拒否回避欲求	.319 **	.170 *	.549 **	.487 **	.505 **	.488 **	1.000		
8 居心地のよさ	.298 **	.383 **	-.384 **	-.102	.087	-.319 **	-.060	1.000	
9 役割感	.242 **	.215 **	-.507 **	.025	.061	-.279 **	-.191 *	.702 **	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

対人依存欲求と拒否回避欲求、過剰適応と居場所感の関連性の検討

次に、対人依存欲求と自己不全感が過剰な外的適応と拒否回避欲求を介して居場所感に影響を与える仮説モデル (Figure 1) を共分散構造分析によって検討した。説明変数間 (情緒的依存欲求、道具的依存欲求、自己不全感)、媒介変数間 (他者志向性、人から良く思われたい欲求、自己抑制、拒否回避欲求)、目的変数間 (居心地のよさ、役割感) にそれぞれ共分散を仮定した。仮説モデルにしたがって変数間にパスを仮定し、有意でないパスを除いた結果、Figure 2 のモデル ($\chi^2(8) = 7.556$, $p = .478$, GFI = .985, AGFI = .948, CFI = .988, RMSEA = .000, SRMR = .024, AIC =

71.556) を採用した。適合度は十分な当てはまりを示していた。

まず、説明変数 (対人依存欲求と自己不全感) と媒介変数 (過剰な外的適応, 拒否回避欲求) との関連について、情緒的依存欲求は拒否回避欲求 ($\beta = .277, p < .01$), 他者志向性 ($\beta = .407, p < .01$), 人からよく思われたい欲求 ($\beta = .475, p < .01$) に対して有意な正の関連を示した。道具的依存欲求は他者志向性 ($\beta = -.332, p < .01$), 人からよく思われたい欲求 ($\beta = -.176, p < .05$), 自己抑制 ($\beta = -.158, p < .05$) に対して有意な負の関連を示した。相関分析において道具的依存欲求と拒否回避欲求は有意な正の相関を示していたが、有意な関連は認められなかった。

次に、媒介変数 (過剰な外的適応, 拒否回避欲求) と目的変数 (居場所感) の関連について、他者志向性においてのみ役割感に対して有意な正の関連が認められた ($\beta = .294, p < .01$)。相関分析では有意な相関が認められたものの、他の過剰適応の下位尺度および拒否回避欲求と居場所感の間には有意な関連は認められなかった。

説明変数 (対人依存欲求と自己不全感) と目的変数 (居場所感) との関連については、情緒的依存欲求は直接的に居心地のよさと役割感に対して有意な正の関連性を示した (順に, $\beta = .227, p < .01$; $\beta = .169, p < .05$)。また、道具的依存欲求は直接的に居心地のよさと役割感に対して有意な正の関連性を示した ($\beta = .279, p < .01$; $\beta = .192, p < .05$)。自己不全感は役割感と居心地のよさに対し、直接的に有意な負の関連性 (順に $\beta = -.576, p < .01$; $\beta = -.409, p < .01$) を示した。対人依存欲求と自己不全感の間の共分散は有意な関連性を示さなかった。

上記の結果に基づき、説明変数と媒介変数間、媒介変数と目的変数間の両方で有意な関連性が示されたものについて、間接効果の検定 (sobel test) を行った。情緒的依存欲求が他者志向性を介して役割感に影響する媒介過程について有意な間接効果が認められた ($\beta = .120, p < .01$)。次に、道具的依存欲求が他者志向性を介して役割感に影響する媒介過程について有意な間接効果が認められた ($\beta = -.097, p < .01$)。加えて、自己不全感が他者志向性を介して役割感に影響する媒介過程について有意な間接効果が認められた ($\beta = .109, p < .01$)。また、情緒的依存欲求、道具的依存欲求、自己不全感から役割感に対する直接効果は有意であったため、他者志向性を介した影響は部分媒介であった。

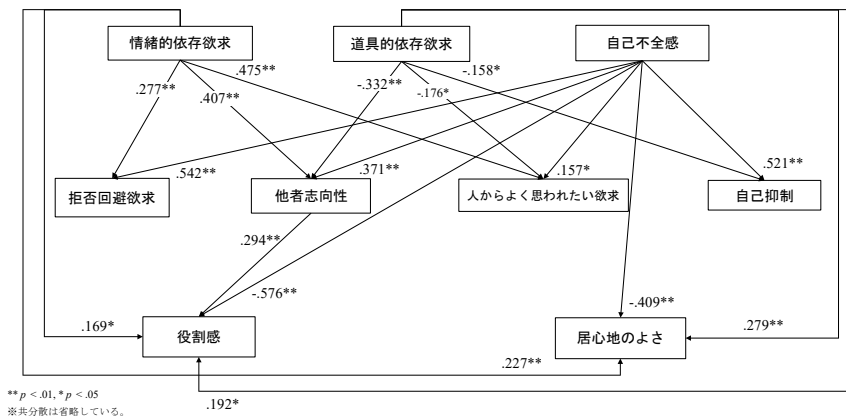


Figure 2. 共分散構造分析の結果。

考察

対人依存欲求と拒否回避欲求、過剰適応と居場所感との関連性について

本研究では、青年期後期における居場所感について、対人依存欲求、過剰適応や拒否回避欲求が居場所感に影響を与える、という仮説モデルの妥当性について検討することを目的とした。

まず、情緒的依存欲求は他者志向性を介した場合に役割感に対して有意な正の関連性があったことから、過剰な外的適応である他者志向性は、他者との関係を維持・形成する機能として適応的なはたらきをすると考えられる。他者からの励ましや助言、気遣い、慰めなど情緒的な支援に対する欲求が、支援を受けるために多少困っても他者のために行動することや、他者からの要求に応えようとする傾向である他者志向性を予測し、それが人の役に立っている感覚である役割感への関連性がみられる結果につながったと考えられる。

次に、情緒的依存欲求は人からよく思われたい欲求、拒否回避欲求に対しても有意な正の関連性を示し、自己抑制に対しては有意な関連性を示さなかった。竹澤・小玉 (2004) は、情緒的依存欲求は「他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を得る」性質を持つと述べている。情緒的欲求は、自分が他者から受け入れられるために、他者に嫌われたり、拒否されたりすることを回避することに結びつく可能性が考えられる。また、小澤・下斗米 (2014) では、支援を受けることに対する心理的な負債感と、自己抑制の高さの間には、正の関連性があることが示唆されている。このことから、情緒的依存欲求の高い人は、他者との情緒的かつ親密な関係性を求めるため、他者からの情緒的な支援を受けることには負債感を感じない性質を持っていると考えられる。そのため、本研究では、情緒的依存欲求が自己抑制とは関連しなかったと考えられる。また、情緒的依存欲求は過剰な外的適応を予測したが、情緒的依存欲求と自己不全感には相関分析と共分散構造分析において有意な関連性がみられなかったことから、「過剰な外的適応傾向を示す者が必ずしも自尊感情が低いわけではない」という尾関 (2011) を支持したといえる。他にも、情緒的依存欲求は直接的に居場所感を予測し、本研究の仮説を支持した。このことから、情緒的依存欲求の高さは、他者との安定した関係性を築くことができている感覚である居場所感を予測すると考えられる。

道具的依存欲求は直接的には役割感を高めると考えられるが、他者志向性を介した場合には、役割感が低減すると考えられる。道具的依存欲求は「自分の能力の足りない部分を他者に補完してもらいたい」という欲求であると考えられ、自分の能力に対する自信の程度が低い状態であることを示す概念であると考えられる。この結果から、もともと自分の能力に対する自己評価が低いことによって、自分が他者のために頑張らなければならないと考える他者志向性を予測した場合に、人の役に立っている感覚である役割感に対して負の関連性がみられる結果になったと考えられる。

また、相関分析において道具的依存欲求は拒否回避欲求と有意な正の相関を示していたが、共分散構造分析において、道具的依存欲求は拒否回避欲求との有意な関連性を示さず、過剰な外的適応に対しては有意な負の関連性を示した。この結果は、本研究における仮説を支持しなかった。また、居場所感の下位尺度である居心地のよさと役割感に対しては、直接的に有意な正の関連性がみられ、本研究における仮説を支持していた。この結果は、道具的依存欲求が「自身の課題や問題解決のた

めに、他者からの具体的な援助を求めようとする性質であり、人とのつながりよりも、課題の達成のために具体的援助を得ることを目的としている(竹澤・小玉, 2004)ことに起因すると考えられる。また、道具的依存欲求は「自分ができないことは他者にやってもらいたい」という概念を含む欲求であると考えられ、道具的依存欲求が高い者は、他者から援助を受けることに対する心理的な負担懸念が低いと考えられる。このような性質が、居場所感を予測するモデルに組み込んだ場合に、自分に対して他者がどのような感情を抱くか、という他者意識を特徴とする拒否回避欲求とは直接的な関連性を示さず、過剰な外的適応に対しては負の関連性を示す結果の要因となったと考えられる。したがって、道具的依存欲求は直接的には過剰な外的適応を低減し、居場所感を高める効果があると考えられる。

自己不安全感は他者志向性を介すると役割感に対して有意な正の関連性があることが示され、本研究における仮説を一部支持した。さらに、自己不安全感は直接的に役割感に対して有意な負の関連性を示し、本研究における仮説を支持した。そのため、自己不安全感が高い場合に役割感は低い、他者志向性を介した場合には役割感が高まると考えられる。「自分に自信がない」、「自分の評価は低いと思う」という自己不安全感が、他者志向性を予測し、役割感を予測する結果となったと考えられる。

また、自己不安全感は、過剰な外的適応及び拒否回避欲求に対して有意な正の関連性を示し、本研究における仮説を支持した。この結果は、益子(2008)の過剰適応傾向にある者は、低い心理的適応感を補償するために、他者の承認を得ようとする可能性があるという主張や、Hermann et al.(2002)の自己不安全感が高い者は、自尊感情を維持するための方略を用いるという主張を支持していた。そのため、自己不安全感は過剰な外的適応及び拒否回避欲求の背景要因として位置付けることができると考えられる。自己不安全感は他の過剰適応の下位尺度と比較して強く対人恐怖心性や不登校傾向と関連すると考えられている(益子, 2009b)。また、風間(2015)は「他者配慮」、「期待に沿う努力」、「良く思われようとする行動」などの他者志向的行動は抑うつとは直接関連せず、自己不安全感が抑うつの直接的な予測要因になることを示唆している。そのため、心理的に適応した状態であると考えられる居場所感に対して自己不安全感は直接的に負の関連性を示し、過剰な外的適応や拒否回避欲求に対して正の関連性を示したと考えられる。

また、本研究において対人依存欲求と自己不安全感には有意な関連性がみとめられなかった。対人依存欲求尺度を作成した竹澤・小玉(2004)は、女性において情緒的依存欲求が高いほど自己信頼感が高く、対人依存欲求が高い人は他者信頼感が高いことを報告している。一方で、自己不安全感は対人的な不信を予測するとされるシニシズムや対人恐怖心性との関連も示唆されていることから(風間, 2015; 益子, 2009b)、「自己不安全感が高い状態」とは、自分に対する自信がなく、他者に対する信頼感が低い状態であると考えられる。そのため、両概念における「自分への自信のなさ」は異なる性質をもっていると考えられ、有意な関連性がみとめられない結果となったと考えられる。

本研究においては他者志向性のみが役割感に影響を与え、拒否回避欲求、人からよく思われたい欲求、自己抑制は居場所感に影響を与えなかった。拒否回避欲求は対人不安や対人恐怖心性を高めると考えられている(佐々木・菅原・丹野, 2001; 三田村・横田, 2006)。一方で、拒否回避欲求が高い者は集団帰属への欲求も高いと菅原(1986)は述べており、拒否されたくないという欲求及び

それに伴う行動は、集団適応の欲求を実現させるための手段であると考えられた。また、人からよく思われたい欲求や自己抑制についても、他者に気に入られたいと思って行動したり、他者の目を気にして自己を抑制したりする行動は、個人の社会適応を支える機能をもっていると考えられた。しかし、他者から認められたい、よく見せたいという感情を伴った行動や、周囲に適応するために必要以上に自己抑制的にふるまうことは、社会適応を維持すると同時に個人の心理的適応を阻害すると考えられる。本研究においてはそれらの欲求及び行動が他者との関係の中で得られる概念である居場所感の程度に影響しているとはいえない結果となった。しかし、前述した適応的側面と不適応的側面が競合して居場所感に対する有意な関連性を観測できなかった可能性がある。他者志向性は他の過剰な外的適応や拒否回避欲求とどのような性質において異なるのかという点も併せて、今後より詳細に検討する必要がある。

また、過剰な外的適応や拒否回避欲求は無条件に本来的な自分が受け入れられているという感覚である「居心地のよさ」には結び付かなかった。このことから、居場所感の下位尺度である「居心地のよさ」と「役割感」には性質の違いがあることが推察された。Deci & Ryan (1995) は、自尊感情を随伴性自尊感情 (Contingent self-esteem) と本当の自尊感情 (True self-esteem) に分けられるとしている。随伴性自尊感情は、社会的な基準に依存していて、自己価値の感覚を保つためにそれらの基準を満たし続ける必要があるという点で、脆弱な自尊感情であるとされる。一方で、伊藤・小玉 (2006) が「本来感 (Sense of Authenticity)」と極めて近い概念であると述べている本当の自尊感情は、自己価値の感覚の維持に何らかの外的な根拠は必要でなく、自分らしくいるだけで感じることでできる自尊感情であると考えられている。自己不全感が高い場合は他者志向的行動を取ることで「自分は役に立っている」という感覚を持つことにつながるが、ありのままの自分が周囲に受容されているという感覚の形成には関与しないと考えられる。この結果を益子 (2009a) の過剰な外的適応行動は随伴性自尊感情を高めるものの、一方で本来感は低めるという主張を部分的に支持していると考えられる場合、「役割感」は過剰な外的適応である「他者志向性」によって予測され「他者に必要とされていると思うか」という外的な基準に依存した概念であることから、役割感随伴性自尊感情に関連する概念であると考えられるかもしれない。また、役割感がそのように他者から求められた基準を満たそうとして生起するものであるならば、外部からの影響を受けやすいと考えられる。しかし、基本的には「役割感」を含む居場所感全体が高いほど心理的適応や学校適応も高いと考えられるため (石本, 2010b ; 石本・倉澤, 2009), 「居心地のよさ」, 「役割感」ともにどういった性質があるのかについて、今後より詳細に検討していく必要があると考えられる。

本研究の意義と今後の課題

本研究は、青年期後期にあたる大学生や大学院生を対象として、自己不全感と対人依存欲求が過剰な外的適応及び拒否回避欲求を介して居場所感に与える影響を検討、考察した。

心理的適応感の高い状態と考えられる「居場所感」が、抑うつ等の心理的不適応を予測する過剰適応と関連する可能性が示唆された。そして、情緒的依存欲求の高さは過剰な外的適応や拒否回避欲求を予測する一方で、直接的に居場所感を高める要因になる可能性が示唆された。また、道具的

依存欲求が高い場合は居場所感も高い状態であると考えられるが、他者志向性を介した場合には役割感が低減することが示唆された。これらの結果は、居場所感の背景要因を明らかにし、居場所感の概念をより詳細に検討する必要性について示唆できた点において意義があると考えられる。

一方で、本研究の限界や課題としては、第一に、本研究では一時点における調査データから変数間の階層性を仮定した関連性を検討した。本研究が注目したような居場所感の背景要因となる欲求、行動などについて明らかにするためには、面接調査や縦断的な調査によって検討する必要があると考えられる。したがって、今後居場所感を予測する要因や過程についての理解を深めるためには、より工夫された研究方法の導入が必要であると考えられる。

二点目に、調査実施時において、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 対策によって多くの参加者が通常と異なる生活を送っていたと考えられることが挙げられる。本研究において調査協力を得られた学生が多数在籍する大学が 2020 年 4 月～8 月に全学生を対象に行った調査 (2020) によると、「同級生や友人とコミュニケーションが取れていたと感じるか」という質問に対し、学部生において「全然取れていない」という回答が 19%であり、「あまり取れていない」と回答した割合と合わせると 47%であった。そのため、参加者の多くが長期間にわたって友人や仲間といった周囲の人々と十分にコミュニケーションを取ることができる状態ではなかったと考えられる。このように周囲とのコミュニケーションが取りづらい状況であったことは、本研究において注目したような居場所感の構成概念である集団への帰属意識、安心感、被受容感等に影響を及ぼしていた可能性がある。したがって、このような状況が改善された後に再度検討することで、より詳細に青年期の居場所感について明らかにすることができると考えられる。

引用文献

- Bandura, A., & Walters, R. H. (1963). *Social learning and personality development*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Bornstein, R. F. (1992). The dependent personality: Developmental, social, and clinical perspectives. *Psychological Bulletin*, 112, 3-23.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M.H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp. 31-46). New York: Plenum.
- 江口 恵子 (1966). 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58.
- 後藤 明梨・伊田 勝憲 (2013). 大学生における過剰適応と居場所感の関連 北海道教育大学釧路校研究紀要, 45, 9-16.
- 原田 克己・出雲 麻佑 (2008). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が援助要請行動とその抑制要因に与える影響 金沢大学教育学部紀要教育科学編, 57, 45-56.
- 原田 克己・滝脇 裕哉 (2014). 居場所概念の再構成と居場所尺度の作成 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 6, 119-134.
- Hermann, A. D., Leonardelli, G. J., & Arkin, R. M. (2002). Self-doubt and self-esteem: A threat from within.

Personality and Social Psychology Bulletin, 28, 395-408.

- 広島大学教育支援グループ (2020). コロナ禍における学生生活に関するアンケート結果と本学の対応について
- 今枝 美幸 (2017). 青年期における本来感の研究の動向——自尊感情・自我同一性・居場所感の観点から—— 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, 17, 21-28.
- 石井 麻美子・荻田 純久・善明 宣夫 (2017). 中学生・高校生を対象とした過剰適応に関する研究：承認欲求とストレス反応の関係から 教職教育研究：教職教育研究センター紀要, 22, 101-110.
- 石川 健太・山口 美和子・澤 幸祐・高田 夏子・大久保 街亜 (2014). 対人依存傾向が視線方向判断に与える効果 心理学研究, 85, 87-92.
- 石本 雄馬 (2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3, 93-100.
- 石本 雄馬 (2010a). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286.
- 石本 雄馬 (2010b). こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所——精神的健康および本来感, 自己有用感との関連から—— カウンセリング研究, 43, 72-78.
- 石本 雄馬・倉澤 知子 (2009). 心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2), 11-16.
- 石津 憲一郎 (2006). 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第 39 回大会発表論文集, 137.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2009). 中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究——個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から—— 教育心理学研究, 57, 442-453.
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討——本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—— 教育心理学研究, 54, 222-232.
- 加藤 敏・神庭 重信・中谷 陽二・武田 雅俊・鹿島 晴雄・狩野 力八郎・市川 宏伸 (編) (2011). 現代精神医学事典 弘文堂
- 風間 惇希 (2015). 大学生における過剰適応と抑うつとの関連——自他の認識を背景要因とした新たな過剰適応の構造を仮定して—— 青年心理学研究, 27, 23-38.
- 川崎 直樹・伊藤 正哉・小玉 正博 (2006). 自尊源への随伴性・充足性と心理的特徴との関連：大学生の自尊心の支え方 日本教育心理学会総会発表論文集, 48, 496.
- 北村 晴朗 (1965). 適応の心理 誠信書房
- 小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.

- 益子 洋人 (2008). 青年期の対人関係における過剰適応傾向と、性格特性、見捨てられ不安、承認欲求との関連 カウンセリング研究, 41(2), 151-160.
- 益子 洋人 (2009a). 青年期における過剰適応傾向に関する研究——外的適応行動と自己価値の随伴性、本来感との関連—— 文学研究論集, 30, 243-251.
- 益子 洋人 (2009b). 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖心性、不登校傾向との関連——高等学校2校の調査から—— 学校メンタルヘルス, 12, 69-76.
- 益子 洋人 (2013). 過剰適応傾向の動向と今後の課題——概念的検討の必要性—— 文学研究論集, 38, 53-72.
- 三田村 仰・横田 正夫 (2006). アサーティブ行動阻害の要因について——対人恐怖心性からの検討—— パーソナリティ研究, 15, 55-57.
- 則定 百合子 (2007). 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 337.
- 小沢 一仁 (2002). 居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み 東京工業大学工学部紀要 (人文・社会編), 25, 30-40.
- 小澤 拓大・下斗米 淳 (2014). 対人場面における自己抑制と不適応との関連について——研究の概観と今後の展望—— 専修人間科学論集心理学篇, 4, 21-26.
- 尾関 美喜 (2011). 過剰適応と集団アイデンティティとの関連 対人社会心理学研究, 11, 65-71.
- 大西 裕子・岡村 寿代 (2012). 自己志向的完全主義・拒否回避欲求と過剰適応との関連：青年期後期を対象として 発達心理臨床研究, 18, 33-41.
- 佐々木 淳・菅原 健介・丹野 義彦 (2001). 対人不安における自己呈示欲求について：賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から 性格心理学研究, 9, 142-143.
- 佐藤 香奈・大津 悦夫・佐野 秀樹 (2013). 大学生の過去の「居場所」と心理社会的発達の関連——「居場所環境」および「居場所」の心理的機能に着目して—— 東京学芸大学紀要, 64, 205-212.
- 関 知恵子 (1980). 人格適応面からみた依存性の研究：自己像との関連において 日本教育心理学会総会発表論文集, 22(0), 572-573.
- 菅原 健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求——公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について—— 心理学研究, 57, 134-140.
- 杉本 希映・庄司 一子 (2006). 「居場所」と心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 高橋 恵子 (1968). 依存性の発達の研究：I 大学生女子の依存性 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.
- 中藤 信哉 (2012). 「居場所のなさ」についての研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 58, 209-220.
- 植野 佐和子 (2017). 大学生における居場所感と人生に対する積極的態度の関連 神戸大学発

- 達・臨床心理学研究, 16, 1-5.
- VandenBos, G. R. (監修), 繁榊 算男・四本 裕子 (監訳) (2013). APA 心理学大辞典 培風館
- 渡邊 美咲・岩瀧 大樹・山崎 洋史 (2018). 心理的居場所感が対人ストレスコーピングに与える
影響——青年期のシャイネスに注目して—— 群馬大学教育実践研究, 35, 337-246.
- 山田 有希子 (2010). 青年期における過剰適応と見捨てられ抑うつとの関連 九州大学心理学研
究, 11, 165-175.